うめく「生」

アフリカ・赤道直下から

―3

孤児襲う異常干ばつ

父母は死に　頼る親類も……

土が白い。ウガンダ東部、ケニアとの国境に近いトゥバ村。この田舎町は、しばしば干ばつに襲われてきた。歩くと砂浜に似た感触が足に伝わる。

モゼス・エモイト君(15)が弟アンジェリ君(10)と一緒に、くわを土に突き刺す。白い土ぼこりが舞う。畑の開墾作業だ。太陽がまぶしい。

2人の父は1992年、母は翌年、相次いで死亡。共にエイズだった。以来、長女アクワレちゃん(13)も含めた子ども3人だけで暮らす。2年前からは、両親を同じ病気で亡くした、いとこのエマルックちゃん(3)も加わった。この国では、両親をエイズで失った孤児を祖父母や親類が預かるケースが多いが、この4人は例外だ。親類が80年代の内戦で亡くなっているからだ。

小さなエマルックちゃん1人を家に置き、お兄ちゃん、お姉ちゃんの3人は毎朝7時から、近所の知り合いを回る。畑仕事を請け負うためだ。一日中働いても、エモイト君とアクワレちゃんは160円、アンジェリ君は60円にしかならない。

週2日も仕事にありつければラッキーだ。3年前から、カサバイモに病気が流行した。昨年暮れから今春までの異常干ばつが、これに追い打ちをかけた。

10歳の少年までもが生活を支えるために畑仕事をする。干ばつのため、くわを入れるたびに土ぼこりが舞う＝ウガンダ・トゥバ村で

4人が暮らす家を訪れた。居間、寝室、どこを見渡しても、家具がない。ガランとした空間に、兄弟の服がわずか3枚、放り出してある。

居間の壁に、額に入った小さな写真が掛かっている。軍服の父と、寄り添う花嫁姿の母。父が亡くなり、母が病気になったころから、たんす、机、テレビ、ベッド、ソファと次々に売り、薬代や食費に換えてきた。

今はもう、売る物はない。請け負い仕事だけでは、生活もできない。5月から、庭に畑を作りだした。しかし、乾燥した土から何が取れるのか。両親の写真の額を売れば、1食分にはなる。でも、「この額だけは絶対売らない」とエモイト君とアンジェリ君は口をそろえた。そして、力いっぱいくわを振り下ろした。

＝つづく

文　小倉　孝保
写真　玉置　勝巳

◇

今年のキャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから救うためのプロジェクトをサポートします。救援金は左記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参下さい。

〒530―51　大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係（郵便振替・00970―9―12891）